

東日本大震災子ども支援宮城県意見交換会が開催されました

日時：2012年9月20日（木）15時～17時

場所：宮城県議会応接室にて

東日本大震災で被災した子どもや子育て家庭の復興支援について、宮城県議会子ども政策研究会からの呼び掛けで、宮城県議会の議員のみなさんと支援者との意見交換会が開催され、参加しました。

当日の参加は、災害子ども支援ネットワークみやぎ代表小林純子さんと東日本大震災子ども支援ネットワーク運営団体から日本ユニセフ協会、キッズドア、子どもの権利条約総合研究所の合計4団体、宮城県庁子育て支援課、議会からは改革みやぎ：4人、自民党：9人、共産党：1人、公明党：1人合計15人の宮城県議会議員と、インターンシップ中の他地域の議員や学生たちの参加がありました。

昨年震災直後の5月に呼びかけて実施した第1回の会には、宮城県の震災子ども支援に関わる団体が県議会に多く集まり意見交換をしました。

その後、県内の子ども支援団体は、定期的に集まって情報交換されるようになったため、今回は宮城県の支援を被災した岩手県や福島県との比較の中で、また国の取り組みの中で今後に必要な宮城県での取り組みを県議会議員と支援者と一緒に議論し考えようということになり、参加者も限定された会として企画されました。

<討議内容>

県内の子ども支援状況は、取りまとめ役の小林さんから代表して話をしていただき、NWからの報告は、NW活動で感じている現段階での子ども支援の課題を事務局長が報告した後、各団体が感じている宮城県での今後の取り組みへの提案を中心に行いました。

各団体からの報告は、当日の配布資料を参考にしてください。

<<約40分間行われた討議のポイント>>

- ・震災後1年半たった時期になったからこそ、子どもたちの我慢屋がんばりも限界にきて、子どもたちに喪失感やいろいろな問題が出て来ている。
- ・家庭や地域が、子どもたちの毎日を受け止めきれなくなっているのも、小学校の低学年の放課後児童クラブだけでなく、その後の青年期も含めて、被災地の特別な支援を緊急に用意することが必要である。
- ・子どもたちの声、声にならない声を日常的に丁寧に聞く人と場が今だからよけいに必要。
- ・子どもの仲間集団を再生するためには、学校以外でも仲間と会えて、支えあえる場が必要。とくに被災地では、家庭や地域にいる場のない中・高校生たちにも重要。
- ・被災地でもいじめは起きる。我慢が限界になっている震災の体験に加えていじめが重なる辛い。被災地だから子どものいじめなどへの対応も特別の配慮をしておくことが必要。
- ・特別な配慮とは何か。過保護にすることではないが、被災地で暮らす子どもたちが失っ

たものを考えると、家族や学校や友人たちの力が復活するまでは、丁寧に子どもたちの状態を見て、必要なものを家庭や学校に代わって提供し、子どもたちが力強く生きていくことを支えなければならない。

- ・子どもたちにしっかり寄り添って悲しみや苦しみを聞き取り、不足していることは、緊急性をもって特別に補強することが必要である。

- ・またこうした会をぜひ開催したい。

(まとめ: 東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長森田明美)